

『シュテファン・バチウ - ある亡命詩人の生涯と海を越えた歌』

刊行記念ダイアログ・1

詩想の水脈 — 旅の「出遭い」に湧き立つ歌

阪本佳郎（『シュテファン・バチウ』著者）

× 川瀬慈（詩人・映像人類学者）

6月16日（日）13:00 - 15:00

於 恵文社 京都 一乗寺店



今日、私たちの下へ毎日のように災厄を告げる報せが届きます。戦火に蹂躪され逃げ惑う人々、紛争や政治的暴力を逃れ国境へ押し寄せる難民たち、大火に消えゆく森林、大潮とともに海へ吞まれようとする島々、滅びゆく夥しい種の生きものたち、人の命を脅かし社会に分断をもたらし機能不全に陥らせるウイルス。雪崩のように「世界」へと襲いかかる災厄は、世界同時的に中継・シェア・拡散されて、ある臨界へ、終末へと、ともに向かっているかのような予感すら私たちに抱かせます。現代は、黙示録的な時代として思考されうるのかもしれませんが。しかし「世界」とは、ある単一の総体であるはずはなく、個別の時間・場所・存在の関係性から開かれる無数の世界の響きあいであり、それぞれが「他者」の物語に対して想いを添えねば——あるいは、添えたとしても——理解しえない混沌でもある。いま見知らぬ遠くに——あるいは近くに——いる「他者」へ、想い致すことができるのでしょうか。

詩人シュテファン・バチウは、歴史の災厄に追いついて世界を彷徨する宿命を負った、知られざる流謫の詩人ですが、かれは、その旅において出遭った「他者」の物語のひとつひとつを、愚直なまでに想いを傾け、魂をかけて震わせ、その詩世界に響かせることで、希求しうる再生の未来に賭けた幻視者でありました。

このたび上梓した『シュテファン・バチウ——ある亡命詩人の生涯と海を越えた歌』は、詩人の生涯の評伝であり、その世界大に広がる詩の連帯を浮上させる試みです。刊行記念ダイアログの第1回は、エチオピアへの旅に出遭った人々へ想い凝らし数々の映像作品を撮り、祈りの詩を書いてこられた川瀬慈さんをお招きします。旅における「出遭い」とそこから拓かれる世界について、対話を深めたいと思います。

【入場料：1500円】

【申込・問合】 恵文社 一乗寺店 tel. 075-711-5919 email: info@keibunsha-books.com

シュテファン・バチウ - Ștefan Baciú 1918 - 1993

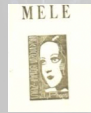
詩人、批評家、ジャーナリスト、アンソロジスト、翻訳家、外交官。東欧の
辺境国ルーマニアはトランシルヴァニアの文化都市ブラショフに生まれ、若く
して戦間期を代表する詩人となる。しかし、第二次大戦後台頭した共産主義政
権から追われるようにスイスへと逃れ、その後ブラジルへ政治難民として亡命
した。リオデジャネイロでも翻訳家、詩人として精力的に執筆する傍ら、ジャー
ナリストの職を得てラテンアメリカ諸国を歴訪。各国の有力紙にて軍事政権
や抑圧的体制を糾弾、政治難民や亡命者の保護のためにペンを振るった。中南
米での十数年を経たのちシアトルへ。ブラジルでカステロ・ブランコ将軍によ
るクーデタが勃発して後、リオへの帰還を断念し、ハワイへと移り住んだ。



ルーマニアというヨーロッパの辺境に息づく民話・伝承世界の靈性を抱いて旅立
ち、ブラジル・ラテンアメリカの土着の祝祭的感性とそれを呼応させ、ハワイでは
豊穡の海と火山、島の大地へと祈る神話宇宙をくぐり抜け、詩を紡いだバチウ。苦
難に翻弄され、ことごとく移動を余儀なくされながらも、断ち切られる土地や人々
との関係性を、〈郷愁〉とともに言葉にして蘇らせつつ、それを新たに出遭う世界
へと結びつけ詩とすることで、歴史の災厄を生き延びた。

詩誌 MELE International Poetry Letter 『MELE 詩の国際便』

1965年から1994年まで、バチウによって刊行された詩誌。MELEとは、ハワイ語で「歌」や「詩」「祈り」を意味する。ルーマニア、ハワイ、ラテンアメリカ諸国はじめ、各地の詩人たちの詩が、国家や民族、言語の境界を越えて集った「詩の国際便」。全90号に、数百名の詩人や作家が参加、凡そ30もの言語が響きあい、60以上の国へと撒かれた。軍政や抑圧的体制に苦しんでいたラテンアメリカの詩人たちが作品を寄せ、ルーマニアの亡命作家・詩人あるいは、祖国に残る抵抗詩人たちも作品を書き送っていた。ハワイ群島の先住民たちに移民の芸術家たち、太平洋諸島域から作品を送った人々も多岐にわたる。英語はもちろん、当時消滅しかかっていたハワイ語で詩を寄せる人々もいた。その詩のコミュニケーションは、言論封殺や植民地主義的圧政に虐げられ声を失った詩人たちに、言葉のアサイラムを提供していた。MELEとは、歴史に翻弄された詩人たちが、生きることの内奥にある物語を持ち寄った、希求の意志の交響体。土地それぞれに固有に歴史があり、それを生き抜こうとする多なる精神がそこに集っていた。大洋を跨いで広がる詩の連帯には、暴力に満ちた災厄、喪失の痛苦のなかにも生をもとめる苛烈な声が渦巻き、他者との邂逅を喜ぶ交歓の声が溶け合っていた。MELEについて考えることは、今日世界を覆っている暴力と悲寛容の連鎖に相對する時に、多くのことを教えてくれるように思う。



川瀬慈 (かわせ・いつし)

映像人類学者。1977年生まれ。国立民族学博物館教授。エチオピアの吟遊詩人、楽師の人類学研究を行う。人類学、シネマ、アート、文学の実践の交点から創造的な語りの地平を探求。主著に『ストリートの精霊たち』（世界思想社、2018）、『エチオピア高原の吟遊詩人 うたに生きる者たち』（音楽之友社、2020）、『叡智の鳥』（Tombac/インスクリプト、2021）。近刊に、『見晴らしのよい時間』（赤々舎、2024）。

阪本 佳郎 (さかもと・よしろう)

1984年、大阪生まれ。詩人シュテファン・バチウの足跡を追ってルーマニアからスイス、ハワイへと旅を続けてきた。現在、立命館大学・非常勤講師。2019年には、詩人の生誕百周年に際し、詩誌MELE ARCHIPELAGOを刊行。2024年、『シュテファン・バチウ ある亡命詩人の生涯と海を越えた歌』を上梓した。